

〔35〕 文化庁芸術祭五十年に思う

伝統芸術にはむしろ変質と変節を

1995年12月16日 東京新聞 夕刊

三十年ほど前には、文化庁芸術祭は国民的なイベントだった。人の心が芸術に対して大きな渇きを覚えていたからだろう。存在の基盤が危うい時ほど、人間は芸術の支えを必要とする。しかし生活が安定するにつれて、芸術の本質を見つめようとする気持ちは薄らいできたような気がする。

芸術祭で面白いのは、伝統芸術と外来の芸術とが一つの土俵で肩を並べていることである。音楽部門でも舞踊部門でも、日本古来のものと西洋伝来のものを同じ審査員が比較して判断する。

この奇妙な二本立ては、じつは日本の芸術文化が抱える一番大きな問題なのである。元をたどれば百年前、明治政府が西洋伝来のものを「公式の」芸術と定めたことに端を発する。

おかげで私たちは現在、オペラの有名なアリアから鼻歌で歌うことができるけれども、長唄の一節をくちずさむことができる人はとても少ない。このまま行ったら、そう遠くない将来、日本人のおおかたにとって邦舞も邦楽も、どこか異国の芸術のように見覚え聞き覚えのないものになってしまうかもしれない。

昨年の末、チェコのプラハを訪れたときのこと、国立劇場の関係者が感動的なエピソードを話してくれた。ソ連の支配下にあったとき、劇場の施設として使われる土地建物は国の財産だったが、自由化されたとき元の持ち主に返却された。ところがその持ち主は、返された不動産を年間百円ほどの信じがたい

[35] 文化庁芸術祭五十年に思う

伝統芸術にはむしろ変質と変節を

1995年12月16日 東京新聞 夕刊

低料金で劇場側に無期限で貸すことにしたというのである。その言い分は「封建時代に貴族だったころから芸術にはできる限りの支援をしてきた。国のものになろうが自分のものになろうが、芸術を守るのは当然の義務だ。」

フランスでも、文化は大革命のあらしを生き延び、ロシア革命も芸術を保護する政策を取った。それは芸術文化が一国民の個性と尊厳を主張するうえで力強い手段であると、いつの時代の政権も十分に認識していたからだ。文化というのは、政治形態やイデオロギーを超えて生き残るべきものなのである。

文化は、土地に根付く植物と同じように、風土や歴史から養分を吸って花を咲かせるもの。そう考えると、明治政府や第二次大戦後の日本の文化的な「接ぎ木」政策は、あたかも日本人から自己表現の手段を奪い取るに等しい暴挙であったと思われる。

今の政府も日本固有の伝統芸術の保護に力を入れていないわけではない。また、それぞれの芸能に携わる人々も、真剣な精進を怠っているわけではない。しかし、しなやかに時代に寄り添うしたたかさに欠けているのも事実だ。

単に伝承と保存を心掛けるだけでは、ほんとうに芸術を守ることはならないのではないだろうか。芸術は子どもと同じで、守りつつも未来へ向けて大きく育てなくてはならないのである。そして未来を生きる子どもは、良くも悪くも、決して親と同じではない。そのことを身にしみて知らぬ人はいないは

〔35〕 文化庁芸術祭五十年に思う

伝統芸術にはむしろ変質と変節を

1995年12月16日 東京新聞 夕刊

ずだ。

その意味でも、今の日本の伝統芸術に求められるのは過去をそのままに保存することではなく、自らの内部にあえて変質と変節を取り込んでいくことではないかと私は思っている。